

---

# 何故私！？

よっぺ意

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

何故私！？

### 【Nコード】

N1366BA

### 【作者名】

よっぺ意

### 【あらすじ】

ある日、私は、キャバクラに連れていかれ、働けと言われるし、嫌なら男と寝ろだあ！？あり得ない、実に不愉快だ。そもそも、何故私！？

私は働くか寝るか、以外の【第3の選択肢】を簡単に受けて立つ。私は勝者か、それとも敗者か  
ゲーム相手はイケメンで、性格も言うに言えば特にない・・・のだ  
と思いたい。

汚い言葉づかい、単語等あります。okな方のみでお願いします

## 第1話

）

携帯の音で、私は目覚めた。

ボーっとしながら、着信の相手を見て、ため息をつく。

「もしもし？」

『もしもし？パパだよ！おはよー』

分かりますとも！

流石に毎日かかってくれば分かるよ・・・嫌でもね！

「うん、お早う、私もう学校の準備があるから、またね。」

『今日は・・・』

そう言い残して、私は一方的電話を切り、ベッドの横の机に置く。  
過保護な父親、良い所もあるはあるんだけどね・・・。

もう一度盛大にため息をつく。

ベッドから降りて、ブーツとしたまま歩く。

キッチンに向かっていたのだが、

ガンツッ！！

ゴミ箱を蹴り飛ばす。

「つつつうー！！」

足を強打。冬だからさらに運が悪い。

痛み倍增。足を押さえながら散らかったゴミをゴミ箱に戻す。

準備を終え、私は家を出た。

・・・時間、大丈夫か？

普段でもギリギリ登校なのに、今日はいつもよりもギリギリのよう  
な気がする。

今何時？

私は携帯を探す。・・・が。

「？」

ん？あれ？あれあれ！・・・ちよつ、まさか！

ベッドの上！？いや、横の机か？

ああ、そんな気が。

まさにアンハッピー！

「はあ。」

本日3度目のため息。

携帯を取りに戻ったのが運の尽きか。私は遅刻した。

I'm late！

先生に怒られた。まあ当然か。

「ってか、凜が遅刻とか珍しー！いつもはギリッギリでも間に合っ  
てはいたのにい。」

昼休み。満面の笑みで私に話しかけてくる、友人の由美だ。

こいつ、人の不幸を笑っちゃってさ。

「由美！朝からスキンに怒られてみなよ、吐き気が。」

朝からスキンヘッドに怒られる、まさに最悪のシチュエーション！

これぞまさにテンション下げポヨ状態だ。

「ブツハ・・・それはそれはご愁傷様！」

私は、がむしゃらに揚げパンを食べる。

「そういえば、明後日の午後さ！一緒に遊ばない？」

由美がいきなり話題を変える。

「え？いいけど、彼氏との約束は？」

由美は最近、彼氏できたし、私と遊ぶ回数もかなり減ったし。  
ここ1カ月は特にそうだ。

「もーいいじゃん！たまには。」

「またノロケ？」

「うるせー！」

ははは。

前遊んだのっていつだったかな・・・。

一か月よりも多いな。恐らく。

帰り道、私は信号機が目の前で赤になり、苛々しながら変わるのを待った。

今日は本当についてないな・・・。

心の中で苦笑。

ガクンッ！

！？

後ろから膝カッコンされた。

これは、あいつか。

「毎回、他人をいきなり膝カッコンするな！幸人！」

私は後ろを向き、怒鳴りつける。ついでに一発蹴る。

「いつてえー！！」

私は女子の方では力は強い、自分でもわかる、一応。

っていうか、これで何度目だ？うーん・・・。

多すぎて数えられないね、うん！

「へっへーお前毎回引っ搔かるから。」

「人として恥ずかしいね！うん！」

もう一度言おう、人として恥ずかしいね！

「お前毎回引っかかるし。」

つておい、そういう問題か？そういう問題なのか！？

いやいや違う！違うぞ！

「そういう問題じゃない。」

ついでに、幸人は3歳からの幼馴染ね。

信号が青になり、私は歩く。

「ここって本当に、ホストだのキャバだの色々あるよなー。」  
それは言えてる。

ここ多すぎるだろ。

毎回通るときは下を向くべきだと思うね！

まあホストキャバだけじゃなくて、ラブホも・・・って、何言わせ  
るんだああ！

そもそも、高校生が働いている時点で終わってるね、世の中！

私はとりあえず頷いた。

ってかコイツ、ずっとついて来るのか？

次の日の帰り道は一人だった、明日は由美と約束がある。

実は結構楽しみにしている私は、結構浮かれている。

恋愛より友情！

これが高校生の私のモットー！

？

後ろから誰かがついて来てる！？

ああ、また幸人か？

今度は引つかからんし！

私は、足を速める。

家に近くなり、人通りの少ないところに入る。

あと少しだ。

「！！！」

背後から誰かに口をふさがれたような感覚が。いや、間違いない。  
っ誰！？幸人じゃあない！？

抵抗するが、男に勝てるはずもなく、私の抵抗は無駄に終わった。

「うがつー！！」

ちよっ、殴られた・・・痛・・・いつ。

私の意識があつたのはここまでだった

目が覚めると、ここはまさかの・・・キャバクラだと思う。

また面倒くさいことだ。

見えて痛い気分だ、ついでに、頭も痛い。（むしろこっち重要）  
私起きていることに気付いたヤツが、こっちに来る。

私のことを殴ったヤツか？

手は縛られていて動けない。

っていうか、この状況で何故誰も私に気付かない？

そんなに影が薄いはずではないのだが……地味にショックだ。

「おい。」

話しかけられるが、答える義理はない。

「おい！」

私は気にせず、人間観測をする。

人間観測は意外と好きだ、面白い。

ガタンッ

私は椅子に座っていたのだが、胸ぐらをつかまれる。

「ここはどこですか？」

男の目をしっかり見て私は口を開く。

「見てわかるだろう？」

「分かりますよ？なぜここにいるのかも説明お願いします」

寝起きの私は気分が悪い。特に今は。

「じゃあ単刀直入に言わせてもらおう……お前は今日からキャバ嬢になつてもらう」

「嫌です」

言うまでもないだろう、私は学生だ、働くほどお金にも困っていない。それにリスクが大きすぎる。

考えるだけで鳥肌が出るな、これは。

男が気持ち悪いほどに笑う、本当にやめてほしいわ。

「じゃあなんで高校生なんかが働いていると思う？」

「知りませんよそんなの」

考えるのも面倒くさい、私は無駄に頭は働かせない。

「知りたいか？」



「結構です、帰らせてください」

眠たい・・・私は欠伸をした。

男が顔をしかめた。

だが男はすぐにまた笑みを浮かべる。

「断ったヤツは、一ホスト（うちの男）と寝てもらって言うてるんだが？」

「どっちも嫌です！」

なるほど、そういうことか。

手駒にするか、カモにするか。ってことか。

ん？

後ろで手をグリグリしてたら緩まってきた、ひもが。

もう少し・・・！

「帰れる方法はないんですか？」

「ちゃんと2択上げただろう？」

と、とれた！

けど、とれたからって、どうすれば！？

男は笑っている。

まるで私にわざとひもとれるようしていたようだ。

「絶っつ対に嫌です。」

本当に嫌だ。

今の状況に泣きたくない。

「ここまで頑固なヤツは初めてだな・・・じゃあ、うちの男<sup>ホスト</sup>にお前を落とさせる、それでお前は抵抗する、っていうのはどうだ？2か月以内に落とせれば俺の勝ち、お前はここで働く、落とせなければお前の勝ち、っていうのはどうだ？」

つまり、私はそいつ<sup>ホスト</sup>を拒否してやればいいって事が、

彼氏いない歴〃年齢。の私にこの条件は好都合、勝つ自信がある。

「いいですよ、そんな余裕です。」

「じゃあ3日後からでどうだ？」

「明日でなければいいです。」

明日は待ちに待った久しぶりの遊びだからな。

「わかった。」

「じゃあ帰らせてもらいます。」

私は立ち上がり、出口っぽい所から脱出した。

ここ2日、本当に災難ばかり。嫌だなもう・・・。

・・・今、何時？

私は携帯の時計を見る。

20時26分。

もう遅いな、どこかで食べていこう。コンビニでいい。

私は家に帰ると、歯を磨いて、お風呂に入って、ベットに転がりつく。

すぐに眠気がして、私は瞼を閉じる。

寝たいけど、すごい嫌な気分だ。

なんで私なのか理解できない。目豚を開く

怒りが込み上げてくるが、すぐに覚める。

今日はもう眠い。

私は再度、瞼を閉じた。

## 第2話

朝起きると、メールが来ていることに気付く。  
私はメールを開封する。

【From由美】

昨日は楽しかった

由美かぁ・・・。

私も楽しかった、とメールを返信して、時計を見ると、いつもよりも起きる時刻が1時間程早い。

おお、たまにはやるじゃん、私！

自分で「たまには」とかつけるんじゃないか・・・！

私は後からつくづく思った。

うーん、珍しく眠くないなあ。

私は二度寝をする気にはなれず、学校の準備をする。

今日も父から電話が来たが、適当にあしらい一方的に切る。  
そろそろ本気でやめてほしいね！

準備を終えても家を出るには30分程早く、私は学校の補習を行う。  
勉強は出来ない訳ではない。むしろ得意だ。

ピンポン

不意に家の呼び鈴が鳴る。

こんなに時間に誰？

一般人からいえば妥当な時刻かもしれないが、私から言えばあと20分遅くに来てほしいものだ・・・！

出るのも面倒だが、もう一度呼び鈴が鳴り、私はドアを開く。

「誰ですか？」

見覚えのない男が突っ立っていた。

何ですか？この方は？

容姿は、ものすごく不本意だが、素晴らしいものだ。

まさにビューティフォー！

服装は、黒いジャケットで中は白のシャツ、そして赤いネクタイに黒いズボン・・・ってこれはまさかの同じ高校の服ではないんだろ  
うか？

でも何故そんな方が私の家に来ているのでしょうか？全く不明です。

「あれゝ店長はあんたって言ってただけどなゝ名前は？」

私の問いに答える気は全くなさそうですね、この方は。　　というか  
そもそも自分から名乗れっての！！

「貴方から名乗るのが礼儀でしょう??？」

私が問うと、彼は軽く笑う。

何、この人、心なしか・・・すごくウザイ！

さっさと消えてほしいものだ。

「そうか、じゃあ俺から名乗ればいいのかな？」

・・・知るかそんなん。

何で私に聞く？ってまあそりゃそうか。でもわざわざ聞かないでさ  
っさと言えはいいのに。

「そうですね・・・できればここに理由も一緒をお願いします」  
さあ、話せ！この下衆野郎！

ってああ、口が悪いですね、サーセン。

お父さんがいたらまずいねって心の長中だから大丈夫か。

「じゃあまず名前は藤原秀斗ふじはらしゅうとっていうんだけど、んで学年は2年。あとここにいる理由は、一昨日って言えばわかるかな？」

分かりません・・・分かりたくないね！！

一昨日って言ったって、確か遅刻して、由美に馬鹿にされて帰るときに幸人に会ってそれから帰り道ギリギリに・・・あ、ああああ！

「あああああ！」

「思い出した？」

ニコニコしながら彼が問う。笑い禁止！ちょっと眩しいね、朝から！

最悪だ、今になって思い出すなんて！ わかっていたらこの扉なんて開かなかっただろうに！！

「そうですね、とりあえず不法侵入で警察に通報したい気分です」

最近 is 本当についていないな・・・。

私は軽い気持ちで携帯を出す、すぐにしまう。

「なんて嘘ですよ、とりあえず帰って下さい」

「それは無理」

はっ！？なんですかコイツそもそも地味に近いですけど、離れてほしいね、初歩に戻って帰ろうか！180度回転してそのまま帰ろうか！誰も止めないし。

「何故ですか？」

私が睨み付けると、彼はそれと反対に笑みつかべた。

「これは・・・そうだね・・・ゲームだよ。勝つか負けるか。ってことだね。勝者、俺には俺の、

メリットが、負けたらデメリットがある、てことだと分かりやすいね。乗ったら最後までちゃんと責任を取ろうか？」

ゲームだと？調子に乗んなよこの下衆野郎！・・・さん！

勝負を放棄してやろうかな。

あ、駄目か、勝負に降りたら最初にかけたものは差し出す。つまり私が・・・で働くということだろう。

それだけは嫌！

「そうですか、まあ頑張ってください、私には興味がないんで、勝つ自信があります」

「俺も勝つ自信しかないね」

コイツは相当ナルシストか？相当気持ち悪い。

うえっ！鳥肌立ちそう・・・！

え？何、この人、まさかとは思うけど・・・。

「早く帰らないんですか？」

せっかく見送ってあげているのに、さっさと帰りなよ。

「学校行かないの？」

行きますよ！貴方が消えたら行きますとも！

だからさっさと消えてくださいよ・・・！

「行きますよ、貴方が帰ったらですが」

「あんたと一緒に行くつもりなんだけど？凜ちゃん？だっけ」

あ、やっぱりそういうパターンですか。

嫌ですけど、無論。

### 第3話

帰ってくれる気はなさそうだ。

どれだけ口論をしても、両者譲らず・・・って所だろう。

このままだと時間だけが過ぎていく。

もう、ヤだなー。

私の脳内天秤からしてみれば、ハゲ男に怒られないほうが圧倒的に優先。今日は特に2回連続、クラスの人たちからの視線も半端無いと思う。

それだけは避けたい！！

いつもより早く家を出ようと思っていたのに、なんて余計なことを口論を続けること10分。

私は遂に折れた。

心の中なんて・・・バッキバキですとも！はい。

「もういいです、そこどいて下さい、できれば私の前から消えてください」

そういうと、彼は外に出る。

消えてほしかったが、どいただけでも良しとしようではないか。

私は靴を履き、学校に向けて歩き出す。

いや、訂正。走り出してますね。

「付いてこないでください！！」

私の体力が先に尽きた。

分かってはいたが、なんという屈辱・・・！

私は早歩きにペース落とすと、並んでくる。

目立つから辞めてほしいものだ。  
というか、息切れもしてねえぞ、ちくしょう！この野郎！

この後私はスペースを遅く歩いたり早く歩いたり工夫はするが、うまく合わされたまま、学校に到着してしまった。  
屈辱過ぎる。

しかも偶然通りかかる由美に、教室で馬鹿にされた時には、私の心はブツブツンキテたね！自分で言おう、心が広い、我ながら。

昼休み、由美は彼氏と食べるらしいので、私は一人で購買へ向かう。  
パンを2人分購入して、【ある机】に向かう。

「愛美、ちよつといい？聞きたいことがあるんだけど……」  
「お代は？」

そう来ましたか、やつぱり。

私は買っておいいたパンを渡すと、彼女は気分がよさそうにそれを受け取ると、立ち上がった。

「じゃあ、上いこ。他人に聞かせたくないし」

「了解」

私たちは屋上へ向かう。

夏や春は人数が多い屋上だが、冬はやはり暖かい教室が好まれ、ほとんど人はいない。

彼女は、恐ろしいほどに情報を持っていると有名で、普段は人の半分も喋ることはないが、情報を言わせるは人の3倍程喋る。何気に教室にいたことに驚いたほどなのだが。何より良かった良かった。  
「で、どうした？」

「うん、えと……学年が1つ上の藤原秀斗ってヤツなんだけど、分かる？」

私の学年はお察しの通り1年。私は分かる情報のみを彼女に教え、情報を手に入れて、脅せないかなあ……。っとまでは一瞬しか考



えていなかったのだが。

「了解。名前は藤原秀斗、クラスは2-C、誕生日は4月28日、身長178、体重59、運動、勉強はかなり上の方。両親は海外にいるようで、一人暮らし、一週間に3度は間違いない告白されていることから彼女は常にいると思う・・・これくらいしか私は知らない。」

これくらいって・・・どうやってここまで調べ上げるものかね？  
まったく恐ろしく思うよ！愛美・・・。

「ていうか、すごいね、どうやって調べてるの？」

「それは企業秘密」

企業まで進んですか！まあ確かにそうかもね。

「うん、分かった、有難う」

「ご馳走様」

苦笑いをして、私たちは教室へ戻る。

そういえば愛美は私の情報も知ってるって事が、一体どんな具合に！？

考えるほど恐ろしい存在！さすが愛美！

教室に変えれば由美が戻っている。

「凜、遅いつ！」

え、え？何すか？え、はい、すみません。

「何？どした？」

私は午後ティーを飲みながら、喋る。

そうすると、耳元で。

「今日朝一緒に来てた人って、彼氏？」

この後、私が午後ティーを吹いたのは言うまでもない、思っておいて欲しい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1366ba/>

---

何故私！？

2012年1月5日21時47分発行